

「やるならちゃんと」

主任司祭 晴佐久昌英

亡き父から学んだ、大切な教えがある。

「やるなら、ちゃんとやれ。」

言うだけでなく、身をもって示す人だった。

ぼくが小学生のころ、教会学校の夏のキャンプが、教会付属の幼稚園で行われることになった。と言っても街なかの教会であり、キャンプらしいことができない。いつの世も同じだが、そういう時、神父は無責任なことを口走る。

「この庭に、プールが欲しいな」

父は、「作りましょう」と答えた。

もちろん、金も人も時間もなし。建設会社のサラリーマンだった父は、同僚に図面を引かせ、資材の提供を取り付け、自ら鉄骨を組んでコンパネをはり、防水シートを敷き、一晩かけて水を入れてプールを作った。強度も計算済みの、ちゃんと泳げる大きなプールだった。それは子供たちにしてみれば、夢のような光景だった。

まぶしい夏の日差しのもと、教会の庭で友達と歓声を上げてプールへ飛び込んだあの日を、ぼくは決して忘れない。その時感じた喜びは、「水遊びが楽しい」と同時に、「ぼくは、愛されている」という喜びだったのだと思う。

今回のクリスマスに、リーダーたちが子供たちに見せた聖劇は、ちゃんとしていた。脚本、演出、演技、美術、すべてちゃんとしていた。ぼくは多くの一流の舞台を見てきたけれど、こんなに愛のある美しい舞台を見たことがない。

一回限りの公演のためにリーダーたちは何ヶ月もの間毎日作業をし、稽古をし、徹夜をした。公演を終えた直後、倒れた者もいる。しかし、子供たちは見ている。ちゃんとしたことをすれば、ちゃんと見ている。一言もしゃべらず、息を飲んで舞台を見ていた彼らは、目に見える美しい舞台の向こうの、目に見えないメッセージをちゃんと見ていたはずだ。「君たちはここまでしてもらっただけの価値ある、素晴らしい子供たちだよ」という美しいメッセージを。

この世で悲しいもの。心のこもらない言葉。手を抜いた儀式。おざなりな宴会。新たな工夫も犠牲もなく、前回と同じままで済ませてしまう行事。すなわち、ちゃんとしていない教会。

そこには、愛がない。